イスラームの信仰を支えるモノやツール③

天理大学人文学部准教授
澤井　真 *Makoto Sawai*

ムハンマド崇敬

イスラームの聖典クルアーンでは、偶像崇拝や多神教の信仰が厳しく禁じられている。こうした背景から、預言者ムハンマドの顔を描くことはイスラーム内でタブー視されてきた。とりわけ1990年代以降の欧米社会では、イスラームとの文化的衝突が顕在化し、クルアーンの焼却やムハンマドの肖像画の掲載が社会問題化した。宗教の尊厳をかけて、多くのムスリムたちが抗議運動を行ってきたことは日本でもよく知られているところである。

しかしながら、中世イスラームの時代には、ムハンマド崇敬が存在したことがこれまでの研究から明らかになっている。その背景には「聖者」（walī）や「執り成し」（shafāʿah）を含む複合的なイスラーム観がある。人々は神に対する信仰だけではなく、預言者をはじめとした聖なる人々に対して、終末の審きにおいて天国に入れるように執り成しを願ってきた。こうした信仰の延長線上に、ムハンマドが創造のはじめから神とともに存在していたというムハンマド観もある。イスラームの聖地が、礼拝の目標であるマッカのカーバ神殿だけではなく、ムハンマドが眠るマディーナ・モスク、そしてムハンマドが天上の旅に出かけたとされるエルサレムのアクサー・モスク（岩のドーム）とされているのは、ムハンマド崇敬と無関係ではない。また、預言者聖誕祭がムスリムの暮らす諸地域で行われている一方で、こうした祝祭を批判的に捉える人々がいる。ムハンマドに対する捉え方は、ムスリムそれぞれの信仰観と大きく関わっている。

預言者たちの聖遺物

図１　預言者ムハンマドの足形（筆者撮影）

ムハンマドへの敬慕や神聖化は、いわゆる「聖遺物」を生み出していった。かつてオスマン朝の首都であったトルコのイスタンブールに、スルタンが住んだトプカプ宮殿がある。現在は人々に開放されており、イスタンブール観光の目玉の１つである。その一角に宝物庫があり、預言者たちの聖遺物が展示されている。そこには、ムハンマドの髭や歯、さらに足形（図１）とされるモノをはじめ、彼が書いたとされる手紙や使用したとされるサンダル、さらに封印の際に用いたとされる宝玉が展示されている。

図２　ヤフヤーの上腕とされる骨（筆者撮影）

さらに、歴代の預言者が使用したとされるモノも展示されている。たとえば、預言者モーセ（ムーサー）が使用した杖、預言者アブラハム（イブラーヒーム）が使用した石櫃、ダビデ（ダーウード）の剣などである。また、キリスト教では洗礼者ヨハネとして知られているが、イスラームでは預言者の１人に数えられるヤフヤー（Yaḥyā）の上腕とされる骨が所蔵されている（図２）。

図３　アリーの剣（筆者撮影）

また、正統４カリフたち（彼らは預言者ムハンマドの娘たちと結婚しているため、ムハンマドは義父にあたる）をはじめ、ムハンマド一族の聖遺物もある。たとえば、ムハンマドの従兄弟アリーは「ズルフィカル」（ズー・アル＝ファカール　dhū al-faqār）という称号で知られた。「裂けた（剣）の保持者」とでも翻訳できるだろうか。この異名は、アリーが二叉の剣を使用したことに由来する（図３）。

このほか、宝物庫には、イスラーム最大の聖地マッカのカーバ神殿にまつわるモノも展示されている。カーバ神殿を支えた柱の破片や扉、埋め込まれた黒石の摩耗を防ぐ金の覆い（図４）などである。マッカやマディーナはオスマン朝の支配地域であったため、実際にマッカで使用後にトプカプ宮殿に収蔵されたものもあるだろう。一方で、歴代の預言者たちやムハンマド一族が使用した聖遺物の真偽については、ただ単に信じる／信じないという信仰のレベルにあるだけではなく、今日を生きるムスリムたちから見ても疑わしく思われるものもあるだろう。しかしながら、オスマン朝の君主たちが聖なるモノを保持することは、自らの権力を維持し誇示していくうえで重要であった。

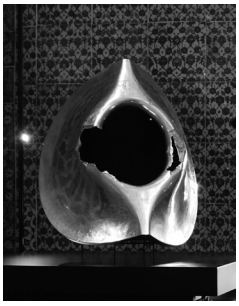

図４　黒石の摩耗を防ぐ金の覆い（筆者撮影）

生者に影響を与える死者

モノが介在するかたちで、生者と死者が接点をもつ場所が、イスタンブール市内では今なお数多く存在し、人々の信仰を集めている。その１つであるトゥツ・ババ（Tuz Baba）の聖者廟は、オスマン朝の建国と関わりが深い、いわゆる「塩の聖者」の廟である。「トゥツ・ババ」（塩の父）として知られるハリール・エフェンディ（1420-1500年）は、イスタンブール陥落を目指すファティーフ・スルタン・メフメト軍に所属する軍人であった。1453年、オスマン軍は塩不足で苦しんでいたが、彼が土を臼で引いたところ塩が出てくるという奇跡を起こしたと言われている。

現在、彼の墓廟の傍らには臼―彼が使用したものかどうかは不明であるが―が置かれている（図５）。また、道路沿いには塩を入れた箱が置かれており、人々は自由に塩を手に取ることができる。この塩を一つまみ舐めると、トゥツ・ババの恩寵（バラカ）によって、その者の願い事がかなうと信じられている。そのため、人々はトゥツ・ババの墓廟を訪れては塩を舐め、満願成就を願うのである。

図５　トゥツ・ババの墓廟（傍らに臼が見える　筆者撮影）

図６　道沿いの塩の箱に集まる人々（筆者撮影）

筆者が友人たちと共にトゥツ・ババの墓廟を訪れた際、塩の箱を発見できずにいた。しかし、帰り際に、道沿いに置かれた箱から、塩を取り出す女性たちを発見した（図６・７）。そのおかげで、私たち一行もトゥツ・ババがもたらす恩寵が今なお息づいていることを感じることができた。なお、トルコでは「TUZCU BABA」という名前のついた商品がある。この商品名の由来は当然ながらトゥツ・ババであると推察される。モノを通してイスラームを眺めるとき、聖者たちが今なお生者たちに大きな影響を与えていることが理解できるだろう。

図７　塩の箱（筆者撮影）